

糸が躍る、織の力

鹿兒島・菖蒲学園の「ヌイ・プロジェクト」

シャツの身頃を裏返すと、まるでカリフラワーの房のような、白い粒がぎっしりと並んでいた。針に刺繍糸を通すと、指先に当たる感触を楽しむかのよう、糸端で何十回も玉結びを繰り返す吉本篤史さん。それはやがて真珠の粒のような大きさとなり、卵を産みつけるがごとくシャツに縫いつけられていく。布に糸を「刺す」という単純な行為の積み重ね。が、その膨大な針目の集積が、なんと大きなエネルギーを発することか。糸の霊力が立ち上ってくるようだ。





森木美寿々



東信枝



濱田幹雄



吉本篤史



野間口桂介



濱田幹雄



中原アサエ



高田幸恵

シャツがキャンバス、糸の造形

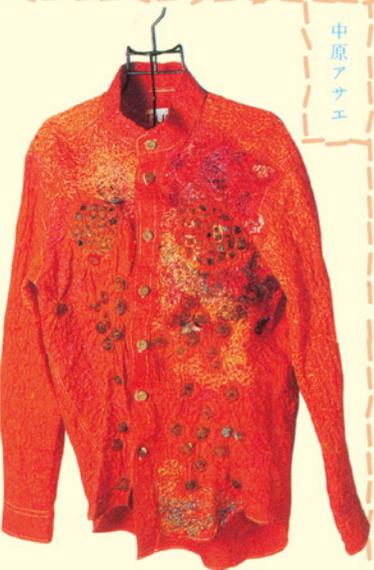
味気ない量産品のシャツが、こんなにも劇的に変身するとは……。シャツを手渡されると、彼らは一心に針を動かし、得意のステッチを刺して、飽きることがない。絡み、もつれ、踊り跳ねる針目。奔放自在な造形と色彩で、新たな表情を得たシャツは、見る者の心を強くゆさぶる存在感がある。刺繍の枠に収まりきらない、この独創の針仕事の主は、鹿兒島にある知的障害者施設、萬蒲学園の園生たちだ。彼らの型破りなステッチに触発され、その個性を引き出す手助けを惜しまない職員たち。両者は「マイ・プロジェクト」を組んで、作品を世に問いかけている。



西元千鶴子



前野勉



中原アサエ



池山麻智子



有村アイ子



東信枝



末満田鶴代



藤村直樹

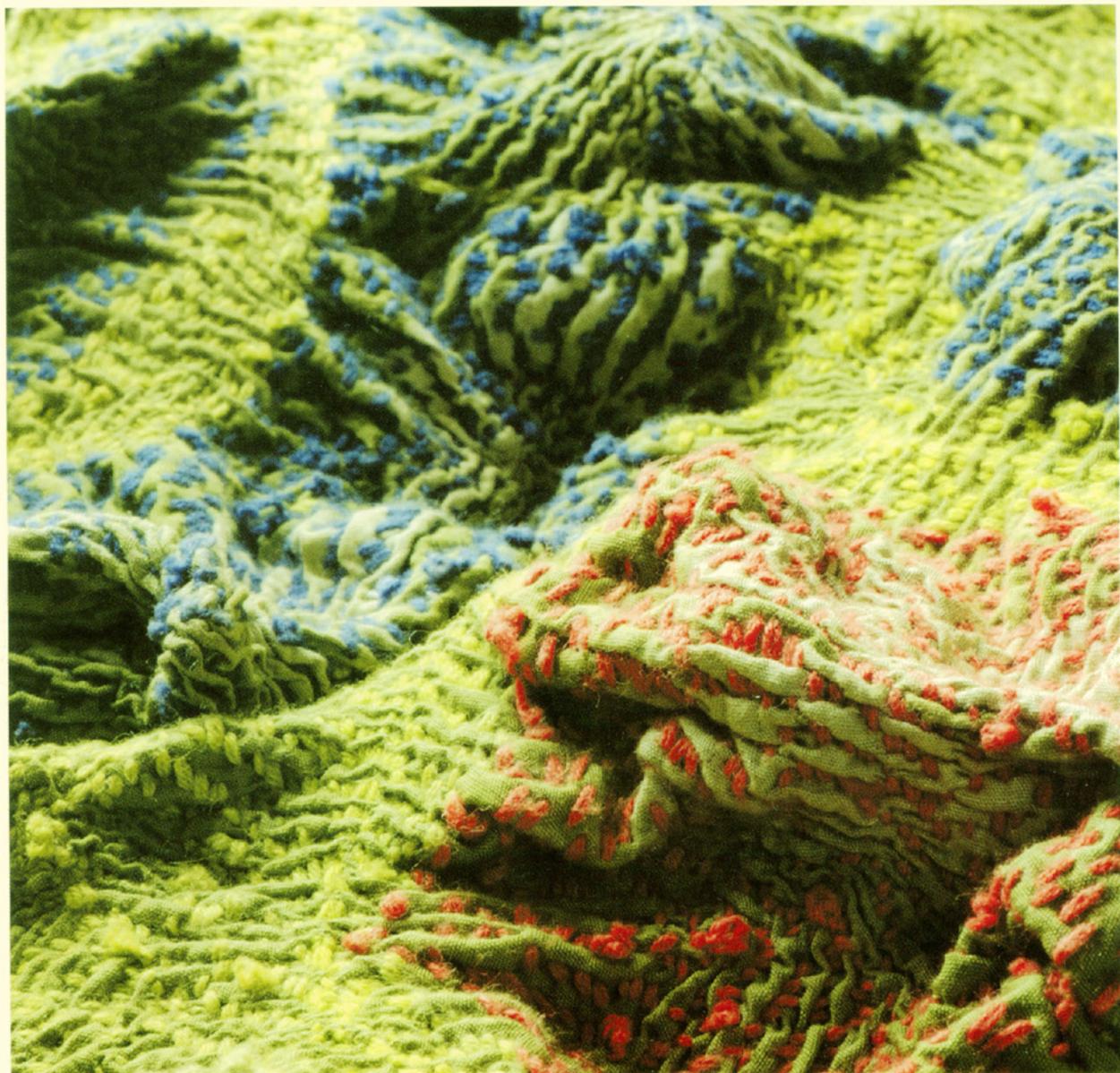


身頃から袖へと縞模様の
続くシャツは、国旗に興
味を持つ野間口さんの最
新作。一枚縫い上げるの
に半年かかり、大人サイ
ズのシャツが縫い縮まっ
て子供サイズとなる。

波打つ針目

野間口桂介





机の上にシャツをひろげ、野間口桂介さんは生地を一針一針すくうように刺す。色とりどりの残り糸や糸くずを集めたビニール袋を傍らから離さず、針の運びの調子がいいと、歌を口ずさむのが聞こえてくる。二本どりの糸の長さは二十センチほど。糸の引きが強いのだろう、玉止めするたびにシャツは縫い縮まる。すきまなく刺すうちに、刺し子の胴着のように固くなる。やがて全体をステッチが覆い尽くすと、シャツは生き物のように身をよじって、立ち上がる。



上—文字を刺した布を職
員が接いで、シャツに。
下—数針刺してはこま結
ひで止めるので、裏には糸
端がフリッジのように連
なる。それがおもしろく、
裏を表に返したシャツ。





初めに四角の輪郭を縫い、内側を等間隔のステッチでぐんぐん埋めていく。針の運びは誰よりも速い。一定のスピードを保って職人のように手が動く。刺繍班に加わったころ、今村哲也さんは文字を刺していた。「子ねと用子ねこの本ねと用お気に入りねこの日本ねこ」といった文字

や、日付や時間、ラジオの周波数などの数字、両親との約束事やその時間心を抱く事柄だ。それが数年前、夏休み休暇から戻ると突然、矩形を刺すのに夢中になりはじめた。その理由はわからない。が、針目ものびのびと大きく単純なステッチに、繡を楽しむかのような勢いがある。

文字から矩形へ

今村哲也



誰が想像できるだろう。もとは30センチ四方ほどの、薄いオーガンデイの生地。それが、鳥の巣のような糸の塊となった。布を手渡すと、末満田鶴代さんは一面糸で覆い尽くす。生地が見えなくなると今度は、刺した糸目をすくうように刺し、幾重にも重ねる。ゆったりとした針運び。それは終わがなく、やがて不思議なオブジェが立ち現われて、職員がその手を止めるまで続く。



末満田鶴代
増殖する糸

ヌイの塊

かたまり

坂元郁代

何万回と針を刺した

ことか。自由に縫

う喜びに一目

一目があふ

れ、凝縮し

て、塊とな

った。か

つて刺し

千ふさん

をまつす

ぐに縫え

ずに、困

惑してい

た坂元郁代

さん。ある日、

「好きに縫って

いいよ」と声をか

けられ、針を運びは

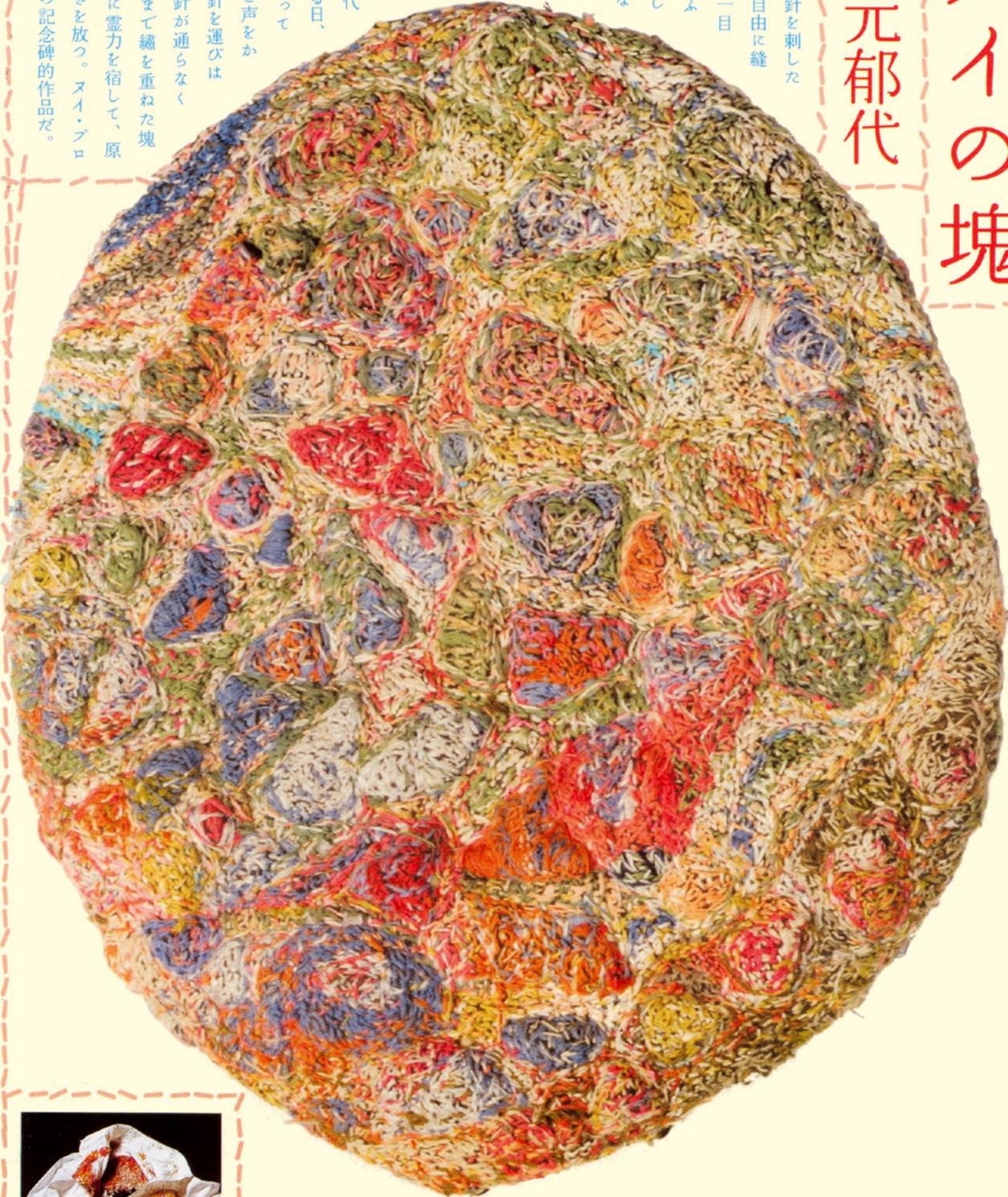
じめた。針が通らなく

なる極限まで繻を重ねた塊

は、胎内に霊力を宿して、原

初的な輝きを放つ。ヌイ・プロ

ジェクトの記念碑的作品だ。



一心不乱に針を運ぶ郁代さんは時に、刺繍用の丸枠まで生地を縫い込んでしまふ。鉄を入れて枠を取り除いた跡をそのまま生かした、アバンギャルドなシャツ。



フレンチナッツ・チェーン・ステッチ。大島智美さんはビーズ粒のような細かなステッチで、モチーフの中を埋め尽くす。気の遠くなるほど緻密な針仕事。リズムでも刻むふうに、手の動きによどみがない。小判やコイン、マンホールの蓋、紋章……。幼いころから、楕円に強い執着を示してきた。そのこだわりは刺繍にも発揮され、くっきりとした色づかいの楕円モチーフを連ねて、独自の世界を描く。



楕円への偏愛

大島智美



感じるままに
縫う人たちの
「ヌイ感覚」……堀口博子

上「布の工房」の刺繍班。作業は午前と午後あわせて五時間半ほど。
みな繡に没頭し、ミシンを踏む音やラジオが聞こえるほかに、静かだ。
吉本篤史さん
窓辺を専用スペースにし、立って刺す。手持ちの針全部に
刺繍糸を通し、十メートルもある糸が工房の床を這う。
作業が終わっても一人残り、黙々と刺していることがある。





池山麻智子さん
織りのメンバーだが、
刺繍ワークに加わることも。
刺し子のように整った針目が美しい。



大島智美さん
興味のあることや作りたいものはつきりとしていて、
納得がゆくまで追求するエネルギーと集中力は驚くばかりだ。

針を運ぶのに決りなんていらぬ、思うままに刺せばいい。

絵を描くように、針と糸を動かしてごらん、おもしろいよ。

「ヌイ・プロジェクト」のシャツを見るたびに、表現にはさまざまな

自由があると気づかされ、心はとても軽くなる。刺繍とも刺し子とも違う、

まさに「ヌイ」と呼ぶのがふさわしい。既成の枠を突き抜ける、強烈な個性に魅せられる。

〈作為のない針の力〉

私がヌイと出会ったのは、サンフランシスコに近い、オークランド市にある障害者のための芸術活動支援センター、「クリエイトイブ・グロウス・アートセンター」のギャラリーだった。ガレージをアトリエに改造した建物の中に、名も知れぬ人々の縫った百六十枚のシャツは胸のすくような圧倒的な迫力で存在していた。

ランニング・ステッチや玉止めなどの単純な針の運びが永遠に繰り返される、反復の強さ。あるいは、なんの規則もなく感じるままに糸を布に絡める、不揃いで不確かな感触。繊維と繊維の間に侵入するような糸の微細な動き。一つとして同じものはない。そうした作品の一枚一枚に触れながら、おびただしい数の糸目に目を奪われ、時間を忘れた。そこにあるのは「縫う」ことの自由を訴えるような、作為を全く感じさせない針の力だった。

その中に、強く惹きつけられたシャツがあった。野間口桂介さんの作品だ。十分のすきなくびつしりと、衿も胸ポケットもすべて縫い尽くされた彼のシャツは、赤ん坊の衣服のように小さく縮み、歪み、シャツそのものが生き物のように立ち上がっていた。「どうしたら、こんなふうに縫うことができるのだろう」その疑問はずっと消

えず、そして念願かない昨年暮れ、鹿児島島の菖蒲学園を訪ね、ヌイの作業を見せていただいた。

〈繡のこだわり〉

その日の工房にいた八人の縫い手たちは、みな同じ長さ六センチの太針に好みの刺繍糸を通し、作業の五時間半、ずっと飽きる様子もなく黙々と縫っている。素材のシャツは大量生産品を主に使い、ヌイを際立たせるためにあえて無個性を意識しているという。

自分のスタイル、というものを鮮烈に印象づける彼らの縫い方。あの小さなシャツの作者、野間口さんは歌を口ずさみながらリズムをとり快調に縫っている。ごみ箱に捨てられた糸くずを集めるこだわりがあり、それをとっても大切にしていた。今村哲也さんは、素早く手を動かし、さつちり正確に縫う人で、今は四角を埋める図柄にこだわっている。ほかに、五メートル以上の糸を何本も布に刺し、立ったまま縫う吉本篤史さん、針を刺す場所を指で一つ一つ確認しながらゆっくりゆっくり縫う西元千鶴子さん、テーラーのように布を大きく広げ、考えるようにじっくり針を進める濱田幹雄さんなど、ヌイ・プロジェクトの縫い手たちはそれぞれに独特の世界を持っている。

「私たちコーディネーターの役目は、そのこだわりをできるだけこたわらせてあげられるようにサポートすること」それは、素材や色彩への働きかけであり、吉本さんや野間口さん、今村さんのような強いこだわりのある人にはむしろ何もしないで放っておくことだという。縫うことに安らぐように針を動かし続ける人たちは、単調さの中に研ぎすまされた感覚を味わっているのかもしれない。「ここに縫われているのは、膨大な時間の集積です。彼らは作品を作ろうとはしていません。彼らの縫い続ける行為と時間が積み重なり、それが結果として作品になっているのだと思います」

〈予測のつかない個性の輝き〉

こうした「行為と時間」をシャツに定着させたヌイ・プロジェクトが始まる、そもそもの起りは十年前に遡る。

菖蒲学園の園長であり、ヌイ・プロジェクトのプロデューサーでもある福森伸さんは、自身が木工作家であることから、工房しようぶの開設に並々ならぬ情熱を傾け、両親から受け継いだ菖蒲学園を、“もの作り”を基盤とし

たユニークな知的障害者更生施設に作り替えてきた。その過程で、パートナーであり学園運営にもかかわる福森順子さんが工房しようぶの刺繍班を担当したことで変化が起きた。

「最初は刺し子ふきんを縫っていました。布に描いた線どおりに縫うことを教えていたんですが、中にどうしても縫えない人がいて、針があっちへ行ったり、こっちへ行ったり。何度刺してもできなくて。でも見ていたらなんかおもしろい。どんどん縫って、線のとおりじゃなくていいから、と声をかけるようにしたら、下の布が見えなくなるまで刺していった、それが生きているみたいに膨らんでいきました」

この出来事が、ヌイ・プロジェクトの代表作品、坂元郁代さんの「塊の刺繍」を生み出すきっかけになった。

「職員は商品として認められるものを作らなければいけないと思うので、下絵のとおりに刺すことを望んでしまふ。だから坂元さんに、自由に刺していいよと言った時は、すごく困惑した様子でした。今までそう言われたことがなかったからだと思います」

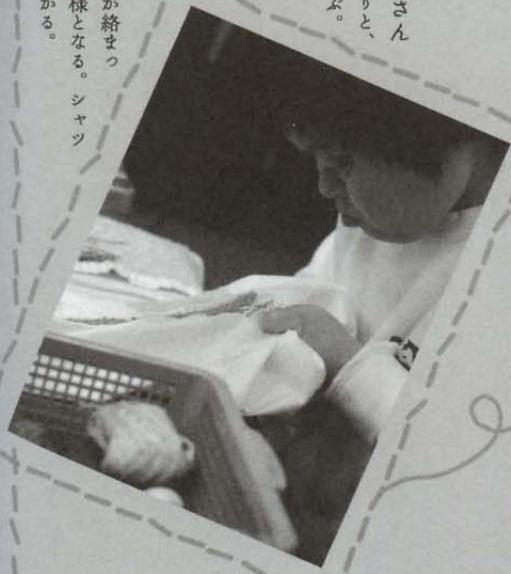
その後の坂元さんは、作品を作るたびに自信をつけ、これまでの時間を取り戻すかのように積極的に縫うよう



今村哲也さん
針を運ぶ手が速く、シャツも多作。数字に強く、唯一腕時計をはめる彼が席を立つと、昼の合図となる。
高田幸恵さん
針仕事が好きという彼女は明るく陽気て、手先が器用。ステッチを自己流にアレンジして、シャツに緻密な刺繍を施す。



西元千鶴子さん
ぶつり、ぶつりと、懸命に針を運ぶ。単純なランニング・ステッチだが、糸を引きさらないので、ループ状に糸が残る、それが絡まって玉となり模様となる。シャツ一枚に一年かかる。





有村アイ子さん
メンバーの最高年齢、七十歳。いつもにこにこと穏やかに、編み物や織りも得意。鮮やかな刺繍糸を四本どりや六本どりにして、大胆なフレンチナッツ・チェーン・ステッチを刺す。
左：布の工房の刺繍班と染め織り班のメンバー、スタッフが全員、中庭に集まった。

になったそう。

順子さんの導いたヌイを、その数年後に加わった土井さんがアップリケのようにTシャツにあって、上からミシンステッチをかけ形にした。それが福森伸さんの模索する創造的な福祉施設運営の方向と沿い、「プロダクトとして自立できるものになりたい」という願いとともにヌイ・プロジェクトはスタートすることになった。

現在は、コーディネーターの土井さん、順子さん以外に、陶芸を兼任する福森泉さんほかのスタッフが、二十人の縫い手たちの作品作りを支えている。新作は二年おきのペースで自主発表され、日本各地、海外でも大きな反響を呼んでいる。一昨年のオークランドでの展覧会以降、海外から作品の購入を求める申し出も多くなったが、「それは本人とは関係ない、外で動いていることで、私たちの思いとも違います。作品だけが一人歩きしてしまうことがいいのか、どうか」と福森さんらは案じている。しかし、作者の代弁者として「ヌイを世に伝えていくことも私たちの役割」とも言う。また周囲から期待が寄せられるヌイ・プロジェクトの将来に対しても、注意深く「縫うスピードに合わせてじっくり進めていこうとしている」。

「彼らの行為を、アウトサイダーアートとか生の芸術と呼んだりしますが、本当のところは何なのか誰も説明できない。しゃべってくれないですからわかりようがないです。でも縫っているとき、彼らの目がきらきら輝くんですよ。そして僕たちが予測もつかないような、凄いや！と思うものを作り出してしまふ。かっこいいじゃないですか」
もつれたり、ほどけたり、縮んだりしながら、感じるままに縫う人たち。その行為を見つめる人々のまなざしが、彼らのこだわりを個性に変え、ヌイの可能性を引き出す力になっていた。



中原アサエさん
丸い刺繍を得意とする。色づかいに独特の感性を働かせ、福森泉さんのミシンワークが加わって、カラフルな楽しいシャツが生まれる。
末満田鶴代さん
オーガンティの生地を握りしめた手もとから、予想もつかない糸のオブジェが生まれる。



写真 飯田裕子、福森伸(107ページ)、
西村浩一(113ページ)、114ページ上、116ページ、
117ページ上)、佐藤浩一(111ページ右上下、
左上、119/121ページ、122ページ右下、左上、
123ページ下右)